

第二章 激戦、八号作戦

ラングーン大爆撃

私ども二百人の移動はバスです。駅より三十分位の町外れに三千坪の運動場のような場所があり、そこに六百平方メートル程の木造の建物が六棟ありました。ここで一ヶ月ほど軽い体操をしたり、ごろ寝をしたりしながら過ごしておりました。

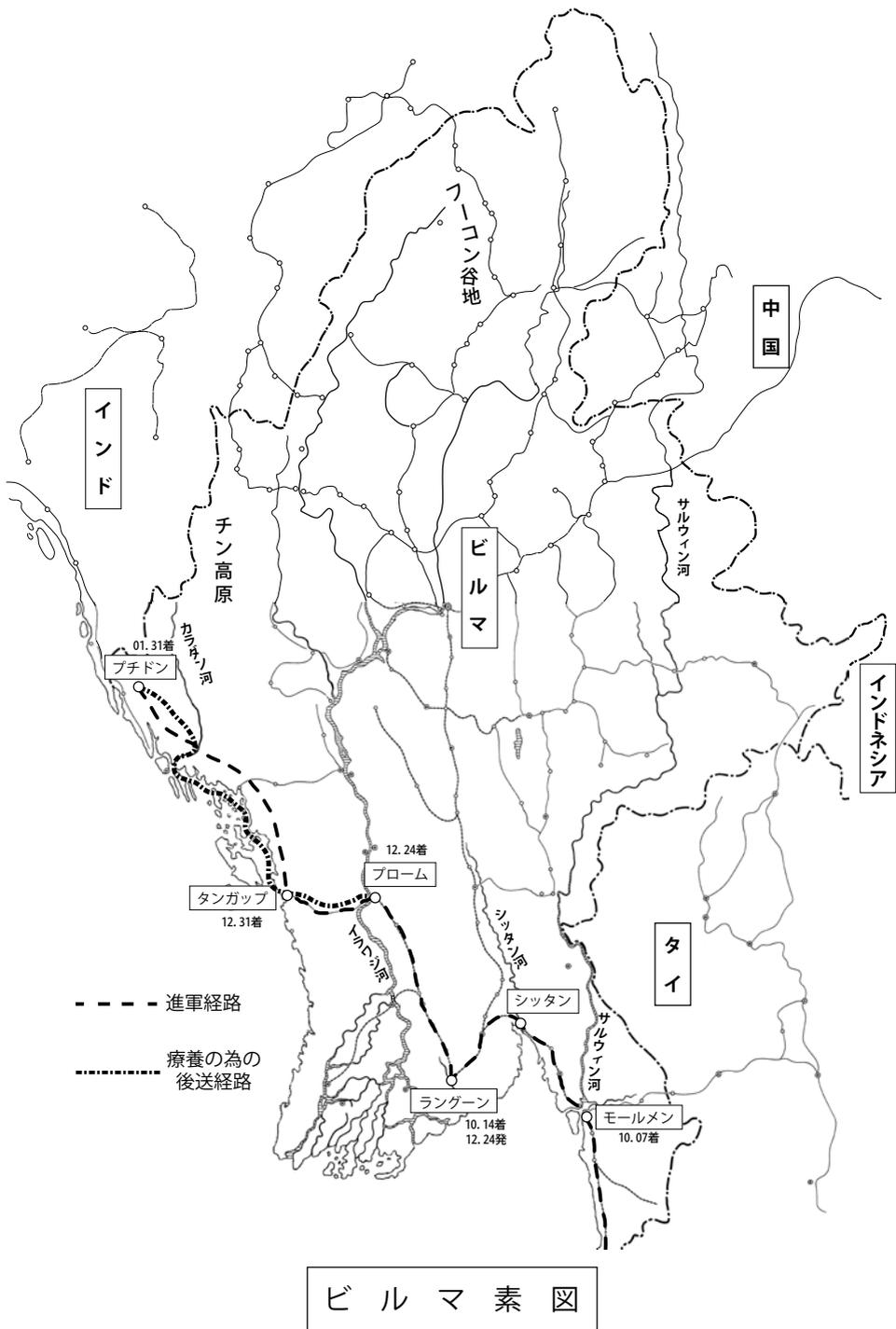
十一月末のある日、午後一時頃に英空軍の空襲警報です。英軍のコンソリーデテッドという双胴の大型爆撃機二十数機の大編隊です。ラングーン防空の日本軍の高射砲で下から打ち上げられるのですが、英軍機は一万メートル、日本高射砲は八千メートル程しか上がりません。英軍は全く動じることなく爆撃を開始しました。一万メートル上空からの焼夷弾の投下は下から見ると、まず霧のようなものが胴体から噴出したのです。次に宣伝ビラを投下したのか、と思ったら小型の爆弾で、焼夷弾でした。落下地点は大きなゴム林の中です。そこは日本軍の野積み倉庫があり、食糧品や兵器、砲弾などがありました。

爆薬類は、小さな地下溝を多く作って類焼を防ぐように設計されていました。その他のものは天幕をかけていましたが、一部弾薬に火が入り、爆発音が鳴り続けました。また一部には火の手が上がり火災が発生しました。英空軍の爆撃は三十分ほどで終わりましたが、倉庫の火災と火薬類の爆発は三時間も続きました。日本よりはるばる輸送したものを大分焼かれたことは残念でしたが、日本兵の死傷者は大勢出なかつたので何よりの幸いでした。

この野積み倉庫の大爆撃により、私どもの計画は変わりました。早朝の体操と運動場内の駆け足です。ラングーンの滞在中も一ヶ月が過ぎ、市内の名所案内を行うことになりました。宿舎を午前十時に中型バスで出発しました。一番にラングーン寺院を見学しましたが、黄金のパゴダが何よりの宝物です。ここのお参りは裸足にならねば入れません。ところが私たちの感覚として、靴まで脱いでお参りするのが納得いかなかったため、パゴダへの参詣をあきらめました。次にローカ湖の側にある兵隊用の酒保です。

私どもは酒を好まないもので、食べ物やさがしましたがあまり上等なもの無く、カレーライス、ハヤシライス、丼物等、なじみのものがありました。またスタジオがあり、ここはせわしく活気がありました。三人で写真を撮ろうと思いましたが、三人は縁起が良くないといわれ、二人ずつ三回写して、故郷の両親へ送りました。しかし、その写真は一枚も届いていませんでした。

この場所はローカ湖の岸边にあつたと思つたのですが、この岸边には、アヒルがたくさん遊んでおり、卵を岸边の草の中へ産み落とすと聞きました。その卵を売っていましたが、アヒルの卵は食べる気がしませんでした。当時の遊び場所は少なく、小さな喫茶室でコーヒーを飲み、三人



ビルマ素図

で雑談をしていました。三時に送迎バスに乗って三十分程で無事宿舎に帰りました。この日は在ビルマの三年間で、唯一、戦友同期生で気ままに遊び、話のできた一日でした。

さて今日一日のラングーンでの市内見学と酒保とシエタゴン、パゴダのお参りも終わりました。最終コースとして女性との遊び場もあるといわれましたが、私ども若年はまだあまり興味が無いということで、ほとんどの人が寄り道なく帰ったのでした。余談ですが女性遊びに行った人たちは、十七時ころ帰ってきました。ところが女性は途中から居なくなつて二時間、三時間待たされたあげく、お姫様は帰ってこなかったということです。

英軍のラングーン大爆撃は日本軍に大きな打撃を与えました。市内には年始より始まる予定の兵站部隊も多く居りました。私どももその滞在兵士でありました。日本軍はインパール作戦の準備中であつたのですが、その動きを英軍はある程度察知していたのでしよう。私どもの部隊もインパール作戦の前衛戦として『ハ号作戦』の計画を練っていたのです。その作戦は全く知らされていませんでした。そして健康体で原隊へ参加できるように、体の鍛錬だけは続けるべきと考え、午前中の運動を始めたのです。十二月中旬に出発予定が出ました。それに合わせて足の訓練も始めました。